

青森県の民俗 第3号

JULY / 2003年

目次

●論文・研究ノート	三戸郡南郷村島守地区の事例から	アンドリュース・デール	1
●柳田國男の神送り	朝神は二杯飲めという世間話	一北の事例から	13
●石像神馬の研究	—南津軽郡平賀町の場合—	近・現代剣道への変容について	23
●身体技術伝承の近代化	—旧弘前藩領における近世流派剣術から	近・現代剣道への変容について	31
●資料報告と問題提起	〈色特集〉	色の民俗・民俗の色	47
●民俗芸能の色	シロとクロの儀礼	—シロからクロへの変容—	80
●赤色の象徴的意味	—「赤米の悲劇」「血の出る木」を中心に—	首飾りの色	89
●白・赤・黒について	の雑考	青森市細越のお山参詣	101
●森山先生と水よーかん	ご高恩を偲んで	森山先生と水よーかん	109
●砂子瀬に始まり砂子瀬に終わる	森山先生を偲んで	漂着神	119
●青森市史編集委員会民俗部会の活動	青森市史編集委員会民俗部会の活動	小野寺	127
●高橋みちよ	高橋みちよ	外崎純一	137
●成田敏	成田敏	三浦貞栄治	144
●石戸谷勉	石戸谷勉	若佐谷五郎兵衛	148

青森県民俗の会

〔論文・研究ノート〕

屋号と村人の世界観

三戸郡南郷村島守地区の事例から

アンドリュース・デール

一、はじめに

本稿では、青森県三戸郡南郷村の島守地区を対象としてとりあげ、地区において今も活きている屋号に焦点を当てて論じてみたい。農村・漁村はもちろん、都会においても屋号を使っている地域は、今なお多数確認される。とはいえ日常的に屋号を使う人の数が日々減っていることは間違いないことで、いずれ屋号は自然消滅の日を迎えるかもしれない。

言うまでもなく地域社会は大きな変化の中にある。県内に見られるあらゆる習俗に対し、高齢化・過疎化の荒波がさまざまな影響を与えていることは間違いない。地域社会の基本を構成する、イエとイエとの関係が激変することもある。そのような時代にあつて、屋号はそれが付けられた当時の人々の世界観を知る手掛かりとなるので、これを調べることで、地域社会の構

成の実体を明らかにすることは可能であろう。本稿における筆者の目的は、かかる認識にたつて島守地区の屋号の全体像を把握し、それを通じて村人の世界観の構成を明らかにすることにある。

ここで聞き取り調査を行なった対象は、旧島守村である。昭和三年（一九五七）、島守村と中沢村との合併で、現在の南郷村が誕生した。島守は、村の東端に位置しており、北を八戸市是川、東を階上町、南を岩手県軽米町と接している。地区内にある島守館の起源は明らかではないが、鎌倉時代に島守家が館から当地域を支配したと言われる。

現在、島守地区は島守と頃巻沢という二つの大字から成る。それぞれはまた、行政区から十二区に分かれる。大字頃巻沢は一つの行政区からなり、大字島守は残りの十一区で構成されている。明治二年（一八八九）の町村制施行により、旧頃巻沢村が島守地区に入るが、本稿ではとりあえず、頃巻沢は除いてまとめることとする。

旧島守村は現在、世帯数七一四で地区の姓の数はおよそ二〇〇ある。村内結婚が圧倒的に多く、ここは縁戚関係が深い地区である。以下は、このような島守地区の家々を回って行なった聞き取り調査の報告である。

二、屋号の分類

屋号の数と種類は、それぞれの集落によつて異なっている。当地区で見られる屋号の多くは、江戸末期から明治にかけて出来たと考えられている。今の世代に出来たものもあるが、特に歴史の古いイエの屋号は大正時代以前に付けられたものと考えられる。屋号で使用されるコトバを類型化すると、人名(名)、先代・先々代の人の名、世帯主の名、職業、地名、家の場所(地形・位置・方角)、本家・分家関係に分けることができる。

(一) 人名

名字をそのまま屋号として用いることは、新しいイエ(初代など)の場合が普通である。とはいへ歴史の古いイエであつても、名字で呼ばれることはある。島守の村人は、屋号になる名字とならない名字を区別している。名字を、屋号としてそのまま使う場合は、イエの世代深度と関係があるものと思われる。例えば、高山のサカイドウ(境藤)がその例である。この名字は村内ただ一軒だけで、集落内外からこのイエはサカイドウと呼ばれ、田代のトクセイ(戸久世)とタテバ(立場)も同様である。

現在、他所から転入したイエは僅かだが、この中で多くのイエは、例えば、嫁に行つた人が実家の近くに家を建てて戻り、

配偶者の姓で呼ばれることがある。この場合の名字は、屋号とは認識されない。新しく転入したイエは、屋号ではなくて名字と呼ばれている。

訛つた発音が屋号となることは一般に見られるが、名字が訛つて屋号となつている場合もある。江花沢のコジャカ(小坂)そして巻のオサーコ(大沢)とオサー(小沢)がその例である。即ち、屋号の発音は人によつて若干異なつていたのである。先代の名を省略したものも見られる。例えば、カンジャブロウはカンジャに略して用いられるようになる。

人名を屋号とすることは広く見られるが、人名が屋号となる場合、代が替わることで屋号が変化する例はいくつもみられる。これは、たとえば、故人にちなんで命名される屋号とは限らない。一方、名前が世代と共に変わらない例も、実際に見られる。先代や先々代の人名がなお屋号として人々の口の上つていて、そのような屋号を用いる中には古いイエが少なからずある。ロクベイ(六兵衛)・マゴシロウ(孫四郎)などがそれである。墓の戒名碑を参考に確認すると、これらの人名は多くは江戸末期から明治に生きた人々のようである。ここで留意しておかなくてはならないことは、必ずしもイエを創設した初代の人の名前だけが屋号として使われるわけではないことである。まず、戒名碑が調査されるならば、屋号に採られた多くの人名が初代ではないということが分かつてくる。しかしながら、先代

の名を用いた屋号の中には、同名別代の例もある。この地区では、以前からイエに関わりのある同じ名前を代を越えて繰り返して付ける習慣があるので、正確にはどの人物にちなんで屋号が定着したかは不明である。しかし屋号に採られた人名が、イエの古い時代の人であると考えることは充分可能なように思われる。とにかく屋号として先代の名を使う場合、比較的古いイエの場合が多いように思われる。このように、時代に関係なく屋号はイエをシンボライズする社会的「顔」の機能を果たしていると思ふことができよう。

村の集落構成は多様で、一血統一名字からなる集落もあるが、一般には複数の血統で複数の名字からなる集落が普通である。屋号の中には、一集落内でイエを識別できる呼称があるのは言うまでもなく、村全体に知られている屋号も沢山ある。また中には、幾つかの集落に同じ屋号が見られる場合がある。その場合、集落と集落を区別するように集落の名を屋号の前につけて呼ぶことで、どこの集落のイエか判別できる。例えば、相畑のサンクロウはアイハタサンクロウとも言い、別な集落のサンクロウと区別される。数多くの血統が存在している島守地区には一血統一名字の多い集落が比較的少ない。とは言え、現在、多数の名字の集落においても、集落の多くのイエが同じ旧家から分岐されたという伝承を持つ集落もある。

(二) 職業

この地区に見られる職業をさす屋号は、他の地区と比較して大きな違いは見られない。イエの職業に関係する呼び方も多く、以前やつていたオケヤ(桶屋)・カジャ(鍛冶屋)・ヤカラ(精米場)という屋号は、時代が替わつても残っている。例えば、鍛冶屋から自転車屋へ、そしてまた自動車販売店になつても、引き続きカジャという屋号が残っている例もある。他方、現在自動車販売店だが、カジャからジテンシヤまで屋号が変わつたイエもある。要するに、職業関係の屋号の中にはそれぞれの時代の変遷を反映する場合とそうでない場合とが見られるのである。最近の職業を示す屋号、キョクチョウ(郵便局長)・ラジオ(電気屋)・トクシヤ(屋根屋)、パーマヤ(美容室)などは前者の例である。

神職のイエとは、世代を超えて境内や社殿を管理し、儀式を担当する役目を持つイエである。これを示す屋号は少ないが、ベツトウ(別当)・ハチマン(八幡)がそれである。島守地区はイタコの密度が高い地域だった。そのことを示すように、イタコ(イダコ)という名の屋号が付いているイエが三軒ある。

職業をさす屋号は、イエのアイデンティティを連想させる。村人の認識において、職業とイエとのアイデンティティは、密接につながつていたと考えられる。以前、村人の大多数が専業農家であつた農村においては、農業とは異なる職業を選択した村

民のイエは、特別に扱われ、社会的なイメージが異なっていたのであろう。

(三) 地名

屋号として用いられる地名は、何らかの形で当該のイエ、あるいはイエ成員と関係した歴史を明示する。例えば現在他所から入ったことが知られているイエの中には、以前住んでいた地名で呼ばれることがある。カントウは関東から来たという言い伝えがあるイエである。ナゴヤはイエの人が戦争中に名古屋にいたため、また同様にカラフトと呼ばれるイエの人はサハリンに出稼ぎしていたからという。こういった屋号は島守地区には、少ない。この屋号により、イエの、もしくは、そのイエ成員の特別な歴史が強調されると思われる。屋号が付けられた時点でイエの歴史がそのイエのアイデンティティの重要な役割であったと考えられる。

(四) 家の場所

イエのある場所の空間的・地形的な特徴をとらえて屋号としているものが少なくない。田んぼの傍に位置するイエはタバタと呼ばれる。旧宅が高い所にあつたイエは、シタガレと言う。崖・坂・丘の前に立っている家はマツカと言う。当地区にはこの屋号が点々とある。マツカという屋号が付いているイエ

の中には、現在のイエの位置と屋号との関係がはっきりしない例がある。馬場のマツカがそれである。以前は土堤の下にあつたが、現在は平らになつていてそこに移転してきた。イエが移転しても、屋号は変わらない例である。しかし、屋号に変更が見られるか否かは、ケースバイケースである。ダム建設に伴い移転した村内の世増・畑内という二つの集落は、移転後も屋号を使い続けているケースが多い。この場合はおそらく、多くのイエが同時に新しい団地に入った為であろう。しかしこの二つの集落から既存の集落へ個別に移つたイエの場合は、以前に使用していた屋号を転居先で使うことはないようである。

屋敷内に井戸があつたイエをイドと呼ぶ例がある。全地区で五軒あり、水道のない時代、ここで井戸端会議が行われ、その意味で集落の社会的中心であつたものと見られる。

続いて、アワという屋号は二つのイエの「間」にあるイエを意味する。このようにイエのある位置から使われるようになった屋号はいくつもある。しかし、この屋号ではイエの空間的位置が示されるが、その本家・分家関係は明らかにならない。江花沢という集落のアワは最近移つて新築したもので、新しい場所が畑の真中であり、現在地を見れば、屋号の意味は理解し難い。だが旧居の場所を見れば、屋号をつけた理由は明確になる。このイエの屋号が時間経過に伴い表面上影響されないことである。従つて、イエの移動と共に屋号がつけられた当時の本来的

な意味を失うこともあるのである。

イエの方角をさす屋号、例えば、シモ(下)・カミ(上)・ニシ(西)・オク(奥)などはよく見られる。これらは、集落の中心部から離れた周辺または端にあつた例が多い。しかし、はるかに深い意味がこれらの方角に基づく屋号にある。方角を用いた屋号は、集落の中で位置を指示する際に、本家または旧家を起点とした方角的な位置関係を示す。集落の境界がどこにあるかはそこに共同生活する人々の空間認識に基づくが、集落内のイエの境界は、地域社会という世界を維持するために制定される。そのような集落のイエの関係秩序を特別視し、集合的にイエは集落を形成する。その形態はカミやシモと付けられたイエは旧家・本家の位置から考えると、集落の社会的な境界を描いており、集落の周辺部に位置することが常である。おそらく多くのイエは、それが最初に建てられる際、旧家や本家の位置が考慮されたであろう。つまり集落構成の原型は、旧家・本家を中心にしてそれを囲む数軒のイエから成り立つと解釈できる。

方角の屋号を持つイエの中には、集落内の他のイエとの創設時期の違いがわかる場合がある。土折集落(地図①)の例を取り上げると、屋号と本家からの位置関係で、本家・分家関係の時代的展開が明らかになる。そこには現在四軒のイエが並んでいる。本家の屋号はそのままホンケという。三軒の分家は独立した順に、イエの裏手を意味するカグジ(家口)、カワバタ(川

端)そしてカワムカエ(川向)という屋号をもつ。これより、分家の建つ方角を、分家創設の時期を踏まえて見ていくと、集落の発展過程を反映していることが明らかになる。分家創設は一般に、中心となる本家から次第に離れて創設される。明治二十年の地図³⁾を見ると、カワムカエという分家はまだなかつた。確かにカワムカエは、最後に出来た分家集落の端にある。本家または旧家の前のイエで、ジョウマエ(城前)という屋号が付いているイエが島守地区に四軒ある。これは沢代・巻・江花沢・中谷地(地図②)という四つの集落で見られる。現在でもジョウマエ(ジョンマエ)というイエは本家または旧家の前にある。

(五) 本家・分家関係

本家の呼称としては、オイ(大家)・ジトウ(地頭)あるいはホンケ(本家)と言い、分家の呼称としては「○○(本家の屋号)カモド」またはただ「カモド」というパターンが一般的である。

ジトウ(地頭)という、ずっと昔の役目をさす屋号が付けられたイエは、世増と古里という二つの集落に二軒確認される。後者は現在オイ(大家)と呼ばれているが、いつの時代に替わつたかは不明という。ジトウとオイはどちらも本家または総本家ということをさす。ジトウと呼ばれるイエは、かなり歴史が

ある有力な旧家と村人が理解する。

本家から独立して生活するイエのことを、イエコマまたはイエコ(家子)というように呼ぶ場合があるが、一般にカモドという。カモドになる際に、物質的あるいは経済的な援助があるかどうかは、そのイエによつて違う。分家するに際して住居、土地(屋敷地・畑・田圃)、道具などを準備してもらつたことは既に過去の話となつてゐる。現在では本家に経済力があまりないため、何ももらはず、援助もなく自力で分家として独立することが普通である。とりわけ都会に住み、会社に勤める分家の人々は、故郷で農業をやつてゐる本家よりずっと裕福な生活をしてゐると村人は言う。

分家は大きく二種に分けられる。シンセキとケライがそれである。前者は本家から出た二、三男などが創設したイエをさす。はじめ、このイエは親族関係の中で出来たもので、分家の初代と本家との血縁関係に基づく点が注目すべきである。それに対して後者は奉公人で働き、独立させた分家であるが、本家との血縁関係に基づくものではない点の特徴である。分家が創設した以来、本家と婚姻関係が出来たことはともかく、シンセキとケライを識別する基準は、分家の初代の人と本家との間の血のつながりの有無である。ということは、ケライという分家と本家との間、新しい婚姻によつて親戚関係が出来ても、もちろんある意味で親戚であるが、ケライとしてイエのステータスは変

人々の認識を示すことでもあるのである。地域社会の中で、新しく生まれた分家が成員として受け入れたかどうか、ある程度、屋号がみることで分かる。

同じイエから分家したもの同士を「アイカモド」という。だが、これは決して屋号にならない。なかにはアイカモド同士で同一の屋号を使つてゐる例もある。これはまた「〇〇カモド」の形を取る。本家の立場から呼ぶと、自分の分家のことは単に「カモド」とのみいうが、他の家系の分家は「〇〇カモド」と呼ぶことが普通である。これは、本家・分家関係の重要性を示す。ただし、隣接する下相野と姉市沢という二つの集落には、「カモド」というイエが一軒ずつある。家系は別としてもその一軒はそれぞれの集落で村人全員に「カモド」と呼ばれてゐる。この場合、村人はそのイエの本家・分家関係を認識した上、一般の呼び名として「カモド」を使用する。

(六) その他

例が少ないカテゴリーとして、家屋の材料を用いた屋号がある。マサヤはマサ葺き屋根にしたイエで、昭和時代以前に出来た屋号と考えられている。全地区ではこの屋号がついてゐる家は七軒である。当時、茅葺が杉の屋根板というマサ葺きより望ましかった。裕福な本家と違って、分家の人たちにとつて茅葺は法外に高かつたので、マサ葺き屋根を付けたと村人が説明す

わらない。昭和初期まで本家の生活のためにケライを働かせたといわれているが、現在の新しい分家は圧倒的にシンセキである。ただし、シンセキでもなくケライでもない本家・分家もある。たとえば、本家が倒産したこと(カモドカエシ)がきっかけで、別な家系の本家と口約束の上で、新たな本家・分家関係が作られる、といった場合である。

本家から分かれて分家になることを、「カモドダダ」という。分家になつたものは、本家の名をつけて「〇〇カモド」と呼ばれることが多い。このような呼称の点で、シンセキとケライの間で、屋号に顕著な差異は見られない。現在、新しい分家は必ず「カモド」をつけられる傾向が窺われる。

古いイエに屋号が付くと同様に、新しく分家となるイエにも、屋号が定着していく過程がある。それは、そのイエが集落の成員として認められるために不可欠な過程である。ただ、この過程は決まつた形をとるとは限らない。例を上げると、平成十四年度、ある地区の会議が集会所で開催された際に、分家創設したばかりの初代のイエから屋号をつけてもらいたいという依頼があつた。そこで集落の人々は、そのイエに対して本家の屋号に「カモド」をつけて屋号を決定した。以後、そのイエは屋号でよばれるようになり、地区の人々からも集落の成員に属するイエとして認められるようになったと考えられる。屋号をもつということは、そのイエが地域社会の成員であるという

る。その意味で、マサヤという屋号はあるイエの当時の経済的なステータスを示すだけではなく、分家であるということも明らかになる。

三、屋号の使用

ならば、そのような屋号は、現実の社会生活の中で、どのような場合に使われるのだろうか。まず会話の中で使われるのは、一般にどこかのイエやそのイエに住む人について話している場合に使われる。自己紹介する時に、若い世代の人たちは年上の人に対して、屋号を使えば、どここのイエに所属しているかをすぐにわかつてもらえる。そのように所属が明らかになると、相手を安心させることにもなり便利が良いとも考えられている。また電話を受ける際に、屋号をいつて名乗るといふ人も多いようである。とはいえ今の時代、遠く離れた他所から来る電話も多くなつたので、電話を屋号でうけたなら、相手はどこにかけたか理解できないことが多くなつたともいわれ、屋号で電話を受けることは少なくなつてゐる。

島守地区のほとんどの集落では、墓地の区画整理が進んできた。その際に、新しくした墓石に屋号を彫りこむ人は珍しくない。以前まで、墓石に屋号を彫りこむことはなかつたそうだが、最近では屋号が書かれた墓石が目立つようになってきた。

そこで墓石を資料として調査を進めてみたが、墓石や戒名碑に記されている屋号が、時には聞き取り調査に教えてもらった屋号と合わないことがしばしばみられた。調査中に、文字記録と口頭伝承の間の矛盾を、何回も経験したのである。ということは、屋号は生きていた伝承なので、変わっていくことは当然の過程である。屋号を墓石や戒名碑に記したものは、全部で七三基確認された。ちなみに島守地区の上頃巻沢では、平成一三年、墓地の区画整理によって新調された墓石一四軒中、五軒が屋号、三軒が家印を墓石に記してあった。何もつけないより、墓碑や柁に屋号などを記した方がよく見えると石材店が勧めたのだそうである。

四、屋号の伝え方

子供は大人の世間話などを聞き、受動的に屋号を覚えるといわれる。今の子供は少し前の時代の子供より屋号に詳しくないかもしれない。確かに今ごろの子供たちは屋号を知らないという配者は言うが、子供たちもある程度屋号の知識を持ち、「イエ」を意識しているように思われる。屋号の知識を獲得しないのは、子供が地元の方言を話せないのと同じことだと筆者は思っている。

大人が地域社会の「構成員」になるためには、地域の知識を

五、屋号の分析

屋号を付けた理由は、そもそもイエ同士を区別するためと言われる。一般に名字を使用していない時代、あるいは同姓が多い所、いずれにしても屋号が役に立つと思われる。一方では、村人は屋号が名字より呼びやすいという。その理由は、屋号に親しみがあるからと説明される。

要するに、イエの区別を表すために考案されたイエの名称を屋号という。イエは本来、村人の主観的意識に過ぎないが、そのイエの意識に名前がつけられると、もはや個人の意識的経験ではなく、多くの人たちの共通認識に変わる。

屋号は狭い意味に用いると、単なるイエの呼び名であろう。しかし、村人にとっては、屋号が云われた瞬間、集合的な多量の知識・情報が伝達されていく。屋号を聞いたとたん、村人はそのイエの歴史、社会的・政治的・経済的な地位、本家・分家関係、親戚関係、宗教的・信仰的な関係など、アタマの中に蓄えられた限らない情報を引き出すことができ、そのような情報を進捗的にその会話に対応している。屋号は村の情報の伝達にとって重要な役割を演じると考えられる。屋号はイエの政治的・経済的・社会的な地位や影響力を表すメカニズムである。外から見るとイエの背景は分からないが、屋号が機能している村に住む人にとっては、イエとイエの関係が明白に理解されている。

知ることは必要なことと考えられる。大人の村人としての役目を果たすために、村のイエに関する知識は不可欠である。屋号はその知識の一部であつて、婿養子や嫁などのように村外から村に入ってくる者は、この地域の知識を獲得する学習過程の第一歩として屋号を覚えることとなる。というのは、屋号を知らなければ、話の内容が通じなくて孤立感を深めることは必ずであるからだ。結局、嫁や婿は村に入ると、屋号を自然に習ったりするという。近くの集落から入れば、ある程度新しく入った集落の屋号を知る可能性がある。但し村人化するというのは、決まったプロセスを採るとは限らないため、人によって屋号を意識する程度は若干異なっている。

地元で生まれた人たちは一番詳しいし、流暢に屋号をつかえる。当然のことであるが年寄りの人たちは若い世代の人たちより屋号を知り、よく使う。それがゆえに若者も、上の世代の人に自分のアイデンティティを明示する際に屋号をよく使う。屋号は言い伝えてくるので、世帯主でも屋号の由緒が何かかわらない例は数え切れない。

当地区では村人同士の日常的な会話に屋号がよく出てくる。しかし、屋号を使わない村人も少なくないといわれる。ただし村人が気づかないほど自然に使用することを何度も観察した。

屋号がコミュニティ・メンバーを指すことから、屋号は村の範囲を限定する道具とみなすことができる。限定される範囲は、村の境界となる。しかし、これは人間が具体的に手で触れることが出来ない境界である。それは村境を定めている地形、そういった川・山・畑・道そのものではなく、これが地域社会を構成させるイエとイエの組み立てと考えられる。

もちろん、昔のように生まれてから、死ぬまで一度も村から出ていない時代には、今の時代から見ると、村の世界ははつきりした狭いものと思われる。この実態では村のイエとイエの関係は、生活上重要な意味をもっていたのである。

村人をとりかこむ世界がどのように構成されているかという点に注目するなら、屋号からはイエとイエのネットワークが明らかになる。多くの屋号は本家・分家関係を指すからである。ところが、現在、村人にとって日常生活の世界範囲が次第に広がってきた。それゆえに交流で見られるイエとイエの関係または本家と分家の関係が実際に減った。車社会の日本には、村人が路上で会ったり、話したりする姿が消えている。

本家と分家は、普通少なくとも祝い事や不幸すなわち結婚式や葬式がある時には行き来する。本家・分家が行き来することはどこでもみられ、本家と分家の人たちは互いに正月や盆に訪問しあつたが、近年、本家と分家の交流や触れ合いなども薄くなったという。確かに以前ほどは行き来していない。こういう

た習慣も消えていると村人は語る。屋号使用の減少は、本家・分家関係の絆の低下を示す赤信号ともみなされよう。

戦前、多くの村人は村内で働いて生活した。自分で作った農産物で自給自足で暮らしていた。ところが、戦後専業農家が少なくなり、村に住んで八戸市に通勤する村人が益々増えてきた。そのため通勤時間などが必要となり、村での共同作業への参加が困難になってきた。以前までは本家・旧家を中心に行われていた共同作業よりも会社の仕事を優先する傾向が強くなってきた。本家と分家の触れ合いが衰え、一般にイエとイエの関係が薄くなった。当然なことで若い世代の価値観は上の世代のそれとは異なる。

村人と話した結果、村人が本家または旧家を重要視していることが分かった。村人はイエの歴史や地位などを筆者に教える。その知識がなければ、多くの話を通じない。つまり村人は、イエあるいはイエとイエの関係に基づいて自分の村を理解している。

村人は屋号の使用によって村の中でのイエの地位と関係を守らせる。自分のアイデンティティは自分のイエから受け、本家・分家の関係の中で自分のイエのアイデンティティは他のイエの体面に関連されている。例えば、「こちらは〇〇カモド」という時、自分の個人のアイデンティティはイエによって明らかにされる。それは村人がイエの一員であるからである。自分のこと

という意味のものである。

集落に結びついているイエの連合という観点から、村人は村という世界を理解すると考えられる。屋号の意味や使い方から取れた手がかりはそれを明示する。

本稿では島守地区における屋号の分析を行ったが、残された課題はまだ多い。今後更に調査を続けることで、その解明を図っていききたい。

〈注〉

(1) 『南郷村史』南郷村史編纂委員会（KK・青森毎日新聞社印刷局、一九七二）六頁

(2) その上、島守地区にある中央団地（一八軒）、築畑団地（二五）という二つの村営団地そして大宇島守字米野（五軒）を本調査から除く。村外や他地区から転入したイエが数多く、調査対象外になると思われる。

(3) 明治廿年十二月調、青森県三戸郡島守村字繪圖、三冊之内参

（千〇三二一〇一一 南郷村市野渡字市野沢平五一）

そして相手のことをどのイエの一員かという観点から理解する。それらの村人が自らの周辺で世界を描く方法は、イエの関係に則して世界を見ることである。そして村人は、イエの構成員として村というコミュニティに参加するものと考えられる。

六、おわりに

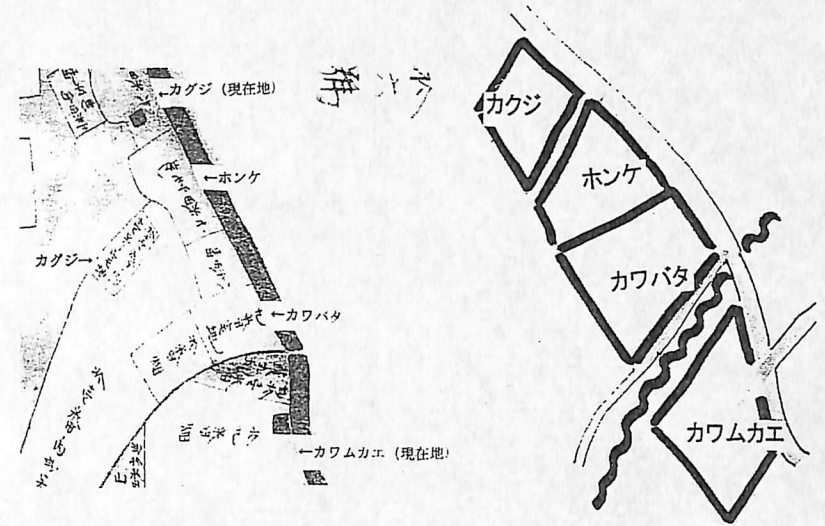
以上、島守地区の屋号を簡単にまとめてみた。その結果、この地区は地域社会の歴史的な社会変化の諸相を垣間みる絶好な地区であった。地域社会で考案された屋号はイエを識別するために存続してきた当地区の文化であり、多くの村人の耳に触れ、親しまれたものである。屋号の分類において、村のイエは空間的・時間的に意識するものということが明らかである。イエの歴史や地位そして他のイエとの関係の情報が屋号に含まれている。

確かに屋号使用の減少には、地域社会の変化が現れている。こういう時代の変化の背後には村の中で、イエの相互関係の衰退が作用しているかもしれない。屋号の機能は、コミュニティとして村のイエを接合するからである。

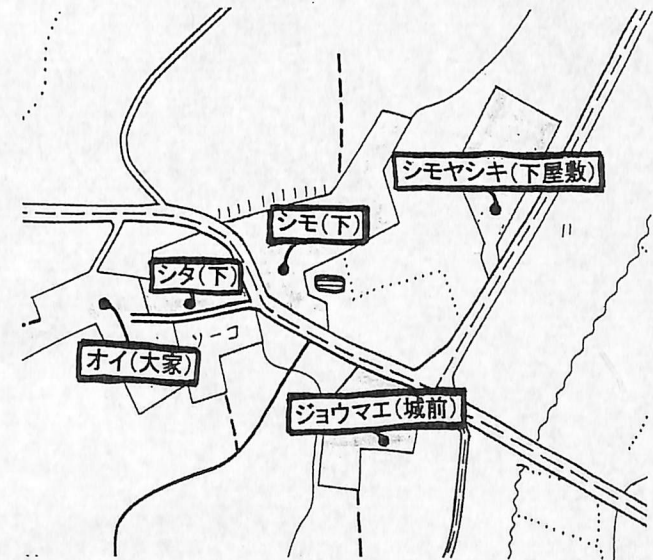
本調査のもっとも重要な発見は、本家・分家の関係を示す屋号が非常に多かったことである。屋号の使用は集落の関係秩序を暗示するものであるが、村人が本家・分家の関係を重視する

明治二十年土折集落

現在、土折集落の家の並び方



地図①土折集落



地図②中谷地